



掲示板 第12号

巻頭	どうぞよろしく	1
報告	全国の動き	2~3
報告	合同会議 1..2	4~5
	千葉懇話会報告	5
	小児パンフレット	5
	講習会報告/書籍紹介【5】	6
	VAIC2010年度中間活動報告	7
まめ知識コーナー(12)		8
インフォメーション・編集後記		8



# どうぞよろしく

こくりつしょうがいしゃ びょういん  
 国立障害者リハビリテーションセンター病院 りんしょうけんきゅうかいほつぶちょう  
臨床研究開発部長  
ふかつ れいこ  
深津 玲子



平成13年度に始まった高次脳機能障害支援モデル事業は18年度より支援普及事業となり今年が10年目です。

私はモデル事業の5年間は宮城県委員として参加し、平成18年に現職として国立障害者リハビリテーションセンターに異動しました。モデル事業開始から数えて私と千葉リハビリテーションセンターのおつきあひも10年目となりました。

モデル事業の対象は主として18才以上の成人、課題は就労、復職でした。太田令子先生がよくおっしゃる通り、小児を対象とされていた千葉リハは異色の存在でした。それが10年経過し、現在支援普及事業で残された対象は小児、もつとも大きな課題は就学、修学、復学となりました。これは高次脳機能障害者支援が全体として成熟してきた証の一つと私は思っています。この課題に取り組むべく、平成21年度より太田令子先生に「青少年期の就学支援」について調査を開始していただいています。

高次脳機能障害者支援事業のスタート時から積み上げてこられた千葉リハの専門性が、今もつとも求められています。今後はさらに支援手法の普及も含め、支援事業の中心となって国リハとともに事業を推し進めていただきたい、それが私の願いです。

## 平成22年度厚生労働科学研究補助金

# 「高次脳機能障害者に対する地域生活支援の推進に関する研究」

## 関東甲信越ブロック・東京ブロック合同会議報告

1. 日時 平成22年8月5日(木)
2. 場所 大宮ソニックステイ
3. 内容

(1) 中島八十一主任研究員から、本事業の今後の見通しとして講演があった。本年6月24日現在で、全都道府県に支援拠点機関が設置された。これは当初の予定よりも遙かに速いテンポで目標達成されたことになる。先日の全国会議でも、支援拠点機関の設置という目標が達成されて、この事業はどうなるのかという質問があったが、今年度・来年度はこれまで通り、各自自治体が独自の展開をしつつ、全国情報を一堂に会して報告し合うことは続ける。また、認知リハの効果を明らかにするため「高次脳機能障害を持ち認知リハビリテーションを受けた患者の社会的帰結」調査を平成22年6月1日から23年12月31日までの機関で実施。24年度からは、これまでと異なった事業展開も考えているが、具体的には未定。

(2) 各都県支援拠点機関の事業の進捗状況について添付資料に基づいて各都県から報告。神奈川県では、支援拠点機関の神奈川県が横須賀・三浦地区にサテライトを設置。相談事業を実施している。また、横浜市が市単独事業で横リハを支援拠点機関として指定。各政令指定都市(横浜、川崎、相模原と神奈川)との連絡会議を年3回開催。東京都は、都のモデル事業として多摩地区と区部一ヶ所を指定。中核になる医療機関と協働で、高次脳機能障害支援事業を展開。区市町村の相談支援員対象の連絡会(年4回)開催し、市区町村窓口の相談員の相談技能の質的向上およびコーディネート機能強化のための育成支援を実施している。

埼玉県では、平成23年3月をメドに、高次脳機能障害者総合支援センターを立ちあげ、診断・治療・相談・支援を一貫して行う予定。センター長が替わっても、組織として高次脳機能障害支援が安定して継続されていくための基礎作りをめざしている。

一足先に支援普及事業を開始していた長野、および茨城・群馬・栃木・新潟・山梨の各県も、支援拠点機関を指定し終わり、独自の課題解決に向けて前進している様子が報告された。

千葉県の報告は別途掲載。

### 全国の動き

### 3. 感想

早期から支援事業に取り組んできたところは、実情に応じた事業展開がドンドン進化しているという印象。遅れて着手している自治体も、それぞれが工夫して、うまく社会資源を活かした事業展開をするための工夫がされている。高次脳機能障害者支援は息の長い支援、多分野にまたがった支援、当事者納得の支援がなければ地域生活を続けていくことが出来ない。そのためにも、各支援者が連携できるようなコーディネーターを数多く育てておく必要があることを改めて考えさせられた。

### 平成22年度 千葉県高次脳機能障害支援普及事業計画

1. 千葉県内の、高次脳機能障害支援ネットワークを充実させ、地域生活を充実させていくための支援

県内の支援拠点機関を、千葉リハビリテーションセンターを県支援拠点機関とし、旭神経内科リハビリテーション病院および亀田リハビリテーション病院を地域支援拠点機関として指定した。



県北部に位置する旭神経内科リハビリテーション病院と県中部に位置する千葉県千葉リハビリテーションセンター、県南部に位置する亀田リハビリテーション病院は、単にエリアとして支援の中心になるだけでなく、高次脳機能障害者の地域生活定着に関わる支援の中から、各支援拠点機関の中心的な支援メニューを協力しながら展開していけるよう全県の支援ネットワークを充実させていくために、担当者会議を開催する。



2. 厚生労働科学研究費「高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究」の「青少年期の就学支援」に関する分野において「小児期受傷・発症の高次脳機能障害児者の支援実態調査」を実施する。後日メールにて核支援コーディネーター宛に調査用紙等一式を送付させていただきます。関東ブロックの各支援拠点機関においても標記調査の協力をお願いしたい。

3. 千葉県支援拠点機関としての千葉リハビリテーションセンターの取り組み

高次脳機能障害者の地域生活支援を推進していくための、県内支援事業者との連携を深めていくための取り組み

①自動車運転再開希望者に対する適切な支援を展開するための評価機能の充実と共に、公安委員会運転免許センターとの連絡の会議を開催する。

②就労および職場定着支援、復職支援をめざして、支援を必要とする人および関係機関との検討会議を継続開催し、支援のシステムの検討を進める。

③復学者のために、学校教育現場に対し当該障害の理解を進め、受傷・発症による二次的障害を予防するための学校訪問を継続実施する。

④昨年引き続き、小児の高次脳機能障害者への支援パンフレットづくりを進める。

⑤地域社会資源利用希望者の社会生活適応をめざした有効な支援を展開するための関係者による検討会の継続的開催を展開していく。また、支援関係者への当該障害に関する周知を目的に、講習会・研修会等を県内各地および各職種を対象に開催する。

支援コーディネーター 太田



今回初めて会議に出席した家族会から感想をいただきました。

8月5日、毎年、記録的最高気温をかもし出す埼玉県で、関東ブロック大会が行われました。会議が行われたソニックシティビルは、大宮駅のすぐ目の前にあったので、覚悟していた程の暑さは感じず、会場に入る事ができました。

受付をすると、その日使われる資料が渡され、座席表を見ると、参加者49名中38名はリハ専門の先生方、当事者および家族会からの参加者は11名で、内お一人は、日本脳外傷友の会理事 東川悦子様でした。席につき開会を待っていると、友の会いばらきの丹波様が、名刺を手にご挨拶にいらして下さいました。4月から保護者代表になった私には、お渡しする名刺もなく、ただただ緊張するばかりでした。

そもそも私達「ハイリハちば」は、とても恵まれている団体で、家族会が立ちあげたものではなく、リハ専門の先生方が会を作った下さりで、そこへ当事者を誘い入れて下さった為、活動そのものも先生方が中心で、家族は参観程度です。その為当事者一人で参加する子も半数以上います。そのような状況で、保護者代表になった私は、文字通り「名ばかり代表」なのです。東京、茨城、栃木、群馬、千葉、神奈川、新潟、山梨、長野、埼玉等の先生方からの発表が終わると家族会代表の発表が始まり、皆さんの意欲的な活動報告を聞きながら、私の頭の中は真っ白になっていくのを今でも覚えています。

とうとう私の番になってしまい「ハイリハちば」設立の起源を話し、先にも述べましたように、先生方主導のもと、偶数月の第三日曜日に、ゲーム、調理、外出、話し合い等色々な企画についても、計画、準備、指導、会報等を行って下さっている事を話しました。その時、私のようなものが保護者代表として、この場にいる事が申し訳なく思いました。

しかし、この経験は、私にとって貴重な経験となりました。

各県の意欲的な保護者の方に触発され、今までのように先生方に甘えてばかりではなく、保護者も何かしなければ。という意識を持ち始めました。ただ私一人では、何もできませんので、保護者の方たちと力を合わせて、幸いにも20名もいらして下さる先生方に、これからお力をお借りして、不幸にも高次脳機能障害者となってしまった子ども達が、これから可能な限り元に戻れるよう、また、保護者が亡くなった後でも、一人で生きていける力が身につくようなりハビリを兼ねた楽しい企画を行って行きたいと考えています。

ハイリハ千葉 保護者代表 石原 ゆみ



# 合同会議1

## 滋賀県



滋賀県では、国の高次脳機能障害支援モデル事業が開始された平成13年頃から、当事者の熱意と県立むれやま荘職員との支援により脳外傷友の会「しが」が発足し、高次脳機能障害に対する啓発活動や県内の当事者、家族等に対する支援が始まりました。

このような経緯から、全国でも珍しく、平成18年6月全国支援拠点事業に先がけて障害者施設である県立むれやま荘に高次脳機能障害の支援拠点が設置されました。

当初から、コーディネーター1名・相談員1名の体制で高次脳機能障害者支援センターを立ち上げましたが、2人体制1拠点では、滋賀県内の高次脳機能障害者全てのケースを支援することは困難と感じています。

施設入所者の方については、Dr1名・セラピスト5名（PT 2.5・CP・OT・ST各1名）にご協力いただきながら評価を実施すると同時に各担当支援員さんのきめ細かな日常観察を手がかりに各人にみあったそれぞれに異なる支援プログラムの検討がなされています。

県内各地域にて支援を受けておられる当事者の方々については、県立病院にて評価・診断を実施し、就労・生活・福祉のそれぞれの担当者との連携することで支援を進めてまいりましたが、教育関係との連携については、まだまだ不十分な面も多く感じておりました。

この度、小児高次脳機能障害者の事例を通じて、千葉リハビリテーションセンターさまと連携して千葉県のノウハウを吸収することと、今後は医療・福祉の連携だけではなく教育・司法関係者への啓発の第一歩とさせていただければ幸いです。

滋賀県高次脳機能障害支援センター

原田 晴美 ・ 小西川 梨紗

私の娘は中学一年生。7年前に突然の脳出血で倒れました。右片不自由の他、軽度の言語障害が残りました。小学校は、特別支援学級に在籍しておりましたが多くの時間を普通学級で過ごし、無事卒業できました。しかし、中学生になり、気にかかる点が出てきました。ノートいっぱい英単語の“this”を練習する。しかし、なかなか覚えられない。今まで右片が不自由だが、あとは健常者と同じと思っていました（思いたかつたのかもしれない）が、何か違うと思いはじめました。

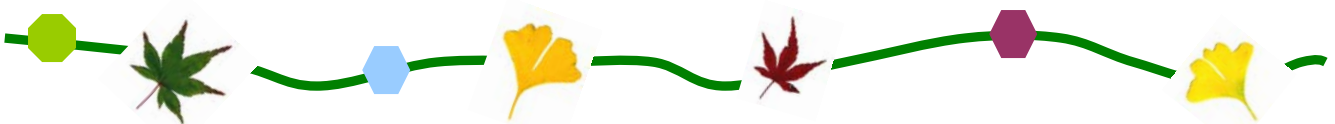
最初は相談を持ちかける所もわかりませんでした。行き着いたのは県の高次脳機能障害支援センターでした。それまで「高次脳機能障害」と言う言葉を聞いたことはありませんが、よくは知りませんでした。娘に対しても、学習面で簡単なことを何度教えても覚えられないことに、時にはイラつき、教える口調が強くなることもありました。娘は、どうしようもできなかったであろうことなのに申し訳なく反省させられます。

現在、高次脳機能障害に対しての検査を受けている段階でこれから支援計画が立てられます。障害の内容、その対応、本人のメンタル面、周囲の理解等、私にとっては初めてのことなので手探り状態です。子供のメンタル面に関しては、本人にどう理解しているか不安に思っておりましたが、心理士の先生にカウンセリングを受けられることとなり、心強く感じています。

私の住む県は、小児高次脳機能障害を診察できる施設は十分にありません。県のコーディネーターの紹介で千葉リハの太田先生に支援の為の会議に参加、専門分野からのご意見を頂きました。症例数の少ない小児で、地方の体制は十分でない中、本当に有難いことでした。

太田先生の会議参加及びご意見に心より感謝申し上げます。

当事者家族



# 合同会議 2



息子が交通事故で受傷してから、8月で3年が過ぎました。高次脳機能障害と診断され、地元山形での訓練や、学校と家庭での生活を続けていました。小学校入学の半年前の事故で、障害に対しての評価も、小児支援の経験のない地域でありました。就学もでき、見た目は健常児とあまり変わりはないので、ある日「もっと、もっと重症な子がいるの分るでしょう」の一言で訓練終了を医師に告げられました。そのような日々の中、親としてできる限りの事をしあげたいと思い、情報を集め仙台・そして千葉リハにたどり着きました。千葉リハでは、半年間の2C棟での療育訓練を受け、その後は山形に戻り学校への訪問支援をいただき、そして仙台厚生年金病院での外来訓練と順調に過ごしてまいりました。

そんな折、この度千葉リハ地域連携部の太田さんはじめ、千葉リハの息子に関わる様々な方のお力添えにより山形県の支援拠点機関に働きかけていただき、3県にまたがり千葉・山形・仙台の医療関係者として学校、家族が一同に会しての合同会議が初めて開催されました。山形県も高次脳機能障害の支援機関が無い訳でもありませんが、セミナー等出席しても社会復帰・就労へのサポートがメインで、小児分野の対象となるものがなく不安を感じているところでした。小児支援の経験がない・評価できる医療機関がないから支援体制がとれないのでは、この先私共家族と同じ思いで子育ての不安を抱いていく家族が増えるばかりです。成長に伴い困った事が相談でき、アドバイスを受けられる環境は、やはり生活圏域にあるということが家族にとってとても有難いものです。

今回、これからの支援目標や支援計画を確認し会いお話ができました。息子にとってもとても貴重なことであり、また山形県も少しずつ前進していく事と期待しております。

3年を経てようやく山形県の支援拠点機関が動き出してくれたのも、千葉リハの支援があつてのことでした。本当に有難うございます。

山形県山形市 高橋 順子

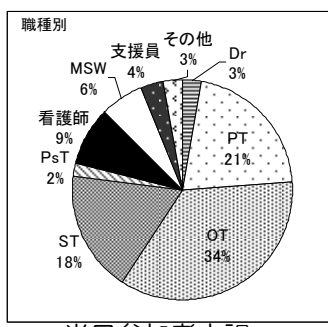
## ■第6回高次脳機能障害児リハの力か-千葉懇話会報告

日時 平成22年7月15日(木) 場所 千葉市民会館 小ホール

【講演】 高次脳機能障害者に対するアプローチ「集団訓練を通して見えてくるもの」

【講師】 神奈川リハビリテーション病院リハビリテーション科 青木 重陽先生

医療リハから社会リハにおける行動的アプローチや認知的アプローチのツールとして有効な集団訓練について講演していただきました。



参加された方から「集団訓練の効果・方法が理解できた」「包括的なアプローチがわかりやすかった」「長期的なとらえ方が大切と理解できた」など今後活用できるという声や「もっと学びたい」という積極的な意見がありました。多数の方にご参加いただきありがとうございました。 地域連携部 森戸

所属機関	参加人数
病院	115
訪問看護ステーション	9
施設	10
就労支援	2
行政	8
その他	10
総計	154



当日は立ち見も出るほど盛況

高次脳機能障害の子どものための家庭や学校生活への適応を支援するために、「高次脳機能障害児のための支援マニュアル(仮称)」というパンフレットの作成を進めています。支援ニーズを捉えた具体的なパンフレットの作成を目指し、昨年度には「小児高次脳機能障害者の生活支援ニーズ・障害実態調査」を行いました。多くのご家族・ご本人の皆様、学校の先生方のご協力を得て、子どもたちが日常生活の中で支援を必要としていること、それに対する有効な対応方法を詳しく知ることができました。

この結果をパンフレットに生かすべく、現在は、高次脳機能障害の子どもたちに共通している支援ニーズ、年齢や障害による特徴的な支援ニーズなどパンフレットに掲載する項目の選定を行っています。また、対応方法を具体的にわかりやすい言葉で伝えられるように、チームのみんなで検討を重ねています。昨年度のアンケート調査に協力いただきましたご家族・ご本人の皆様、学校の先生方、誠にありがとうございました。パンフレット完成まで、もう少しばかりお待ちください。

小児支援マニュアル作成委員会



■第34回日本高次脳機能障害学会報告

今年の高次脳機能障害学会は11月18日(木)、19日(金)、さいたま市の「大宮ソニックシティ」にて行われました。参加しやすい関東圏での開催であり、会長が国リハの中島八十一先生とあって、多くの参加者で活気のある学会でした。内容的にも、「高次脳機能障害者への支援」がより明確にプログラムの中心に位置付けられたのが特徴的でした。

中島会長講演は「日本における高次脳機能障害者支援システムの構築」と題し、モデル事業から支援普及事業まで、支援システムがどのように構築されてきたか、その変遷と意義、課題についてわかりやすくお話し頂けました。今年度、全ての都道府県で支援拠点機関が設置され、支援コーディネーターが配置されたことは当事者にとって非常に意義深いことと感じられました。

「日米における高次脳機能障害者支援の現状」と題した「JAPAN-US Conference」では、日本側から「高次脳機能障害者の発症率」や「職業リハビリテーションの取り組み」、「自動車運転」など実際の幅広い内容の報告がされました。アメリカ側はイラク、アフガニスタンでの兵士の外傷性脳損傷による高次脳機能障害者への支援報告がなされ、日本との背景の違いを感じざるを得ないプログラムでもありました。

演題発表と教育講演、シンポジウム、特別講演と、障害当事者・家族の皆さんにとっても、私たち支援者にとっても興味関心が高い、今後の支援につながる内容が満載の学会でした。

作業療法士 小倉

■高次脳機能障害グループ訓練講座報告

9/11と10/9、NPO 法人東京高次脳機能障害協議会主催「高次脳機能障害のグループ訓練」講座に参加した。

熊本菊陽病院精神科デイケア川上昇八氏「脳機能回復の直接的訓練としての注意・記憶障害のグループ訓練」の講義では、注意課題、記憶課題の具体的な内容の紹介があった。神奈川県総合リハビリテーションセンター心理科殿村暁氏「行動障害者の適応のための通院グループ訓練」では、臨床心理士やSTによる社会的技能訓練、体育指導員やPT、OTによるアクティビティの他、医師、ケースワーカー、臨床心理士がコーディネーターとなって行うコーディネーターセッション(当事者や家族が障害や対処法について学んだり、グループで障害や今後について話し合う等のプログラム)が充実しているという話が印象的だった。「就労・復職をめざす人たちのための集団訓練」では、当センター太田令子氏が当センターグループ訓練を紹介、岩手栃内第2病院山館圭子氏「家族のための心理教育」では、講義の最後にグループワークがあった。1つ1つの当事者の行動から問題点を整理し、当事者や家族の感情を推察するという作業を通して、ポジティブフィードバック(出てくる事・良い所に注目)という方法を学ぶことができ、今後の自分のリハビリに役立てたいと思った。

参考文献：「高次脳機能障害のグループ訓練」中島恵子編著(三輪書店)

言語聴覚士 河合

書籍紹介【5】



高次脳に関する書籍をシリーズ化で紹介していきます

日々コウジ中 高次脳機能障害の夫と暮らす日常コミック

著者 柴本 礼  
 発行年月日 2010年9月発行  
 出版社 主婦の友社  
 価格 ¥1,100(本体価格)



面白い！これが第一印象でした。障害の症状が題材となっているということを念頭において読まなければ、始終笑ってしまう場面ばかり。一方で高次脳機能障害を抱える当事者の方やご家族の苦悩や疲労、そして期待のこめられた相談を受けている立場としては、作者の方も当事者のご家族でいらっしゃるということから、様々な葛藤を経て“面白い”ものとして生み出された作品であろうことが想像されました。高次脳機能障害の世間における認識が高いとはいえない現状の中、筆者の方のコミカルな切り口による症状の説明は、より多くの方々の障害に対する理解を促し、私たち支援に携わるものはさらに研鑽していかなければと刺激を頂いた作品でありました。





## 08Vチームボランティア交流会 ～2010年度活動の中間振り返り～



NPO法人VAICコミュニティケア研究所

3年目をむかえた「高次脳機能障害者の社会参加“ボランティアはじめの一步”」  
8月21日(土)八街にある高齢者福祉施設“風の村”の会議室と風の杜ひろばで中間振り返りの交流会を行いました。

### “ボランティアはじめの一步”とは

社会的リハビリ段階にある当事者が福祉施設などでボランティア活動に参加します。もちろんボランティア活動ですから「自分の意思」で、「やりたいこと、できること」を、「自分のペース」で提供します。とはいってもサポートは必要です。そのサポートをチームで支えます。活動現場で見守りや促しなどをおこなう人もボランティア。その活動を当団体のボランティアコーディネーターと受入施設が連携してチーム活動を調整します。

2008年度は千葉県と協働実施。2009年度は千葉リハビリテーションセンターと協働実施しました。



### 3年目の目標

3年間の事業の目的に照らして総括をし、その実績からボランティア活動の意義を明確にして実施システムのモデル化を目指します。

### 交流会

6月のオリエンテーションで、各チームごとに当事者のボランティア活動の目標と、サポートボランティア、受け入れ施設、ボランティアコーディネーターの活動ポイントを決めました。また、モデル化に向けて、共通の項目でチェックできるようにチェックシートを準備しました。

交流会ではチームごとに2ヶ月間の活動を振り返り、課題を整理し、今後に向けて話し合いました。特に、6月から新たに始めたチェックシートを使った振り返りでは、メンバーのモチベーションが上がったり、役割意識が高まったことが確認できました。

また、8月にスタートした家族チームでは、家族の役割について意見交換しました。体調管理を心がけたり、活動後に話を聞いたり、本人の可能性を信じていることが共有できました。



### 流しそうめん

風の村に隣接する風の杜ひろばで、流しそうめんを楽しみました。つけだれは、ノーマルなめんつゆだけでなく、中華風やイタリアンも。縦に割った青竹を流れてくるのはそうめんのみならず、ミニトマトやチーズ、梅干し、カニカマ等……。暑い中でしたが、竹の香りさわやかな流しそうめんを大いに楽しみ、交流しながらお互いの活動について意見交換を行いました。

(文責：富永ゆみ)





「記憶障害の訓練〜メモリーノート〜」

こちらでは、障害に焦点をあてた中で生活で使える訓練をまめ知識として掲載していきます

記憶障害には、病気や怪我を境にそれ以前の記憶がなくなってしまう逆行性健忘もあります。これからの生活に大切なのは、昨日誰とどこへ行ったのか、今度の診察日はいつなのか等、したことや聞いたこと、これからすることなどを覚えておくための記録力と言われる力です。記録力障害のリハビリの一つにメモリーノートの訓練があります。メモリーノートは、覚えておきたいことや忘れてはいけないことをノートに書き、それを見ることで記録力障害をカバーするための補償手段です。その形は、メモ帳、日記、スケジュール帳といったものから、症状や目的や合わせて訓練スタッフが作成するものまで様々です。メモリーノートは習慣化されて初めて有効な記憶の補償手段となり得ます。そのためには、リハビリスタッフやご家族が根気よく、メモリーノートに書くこと、見ることを促す必要があります。メモリーノートの使用には、過去の振り返りや、先の見通しが出来ることによる不安の軽減や、予定に沿った行動の自立にもつながるメリットもあります。

言語聴覚科 坂居隆

## インフォメーション・おしらせ *information*

### 第7回高次脳機能障害リハビリテーション講習会

日時■2011年1月15日(土)13:00-16:00  
 会場■千葉市文化センター アートホール  
 〒260-0013 千葉市中央区中央2-5-1  
 内容■講演「前頭葉の働き：障害をどう評価するか」  
 講師 三村 将氏 昭和大学医学部  
 問合せ■千葉県千葉リハビリテーションセンター地域連携部  
 Tel 043-291-1831(代)内 183

### 第9回高次脳機能障害交流会

日時■2011年3月5日(土)13:30-  
 会場■千葉リハビリテーションセンター  
 内容■未定  
 問合せ■千葉県千葉リハビリテーションセンター地域連携部  
 Tel 043-291-1831(代)内 177



◆ 編集後記 ◆

■支援拠点機関が全国に設置され、当初の予定より早いテンポで設置された2面で報告されました。早いといえば、千葉ロッテの優勝です。近所でパレードがあると聞きつけ、デジタルカメラ片手に降り注ぐ天からの紙吹雪に見とれている余韻の中、パレードが過ぎるとあっという間に沿道の紙吹雪がない！すごい早い！ものの5分で何もなかったように掃除されていました。感心。前回5年前は、31年ぶりの優勝でした。次に来るのは、そんなに早くないかと思っていた矢先の優勝。次回はいつになるのでしょうか。高次脳の5年前と言えば、12の自治体を取り組み、支援モデル事業の最後の年でした。掲示板の前身である新・モデル事業便りの内容を読むとついこの前あった出来事のように思いました。(Y)

■思い出す手がかりとして嬉しかったことや楽しかったこと、興味がわいたことに関連付けることになってありますね。逆につまらなかつたことや嫌なこと、話題のことも自分に興味がなかったことではない、そのことをきっかけに思い出すことはあまりないような気がします。嬉しい、楽しい、興味を持てる出来事が増やすことはやっぱりいい事なのでしょう。Yさんのように「優勝した年」で振り返って、意外な関係性を発見して話題に出来るのも、興味を持って応援しているから出来る楽しみですね。今年も残すところあとわずか、皆さんは今年を思い出す手がかりとなるような出来事がたくさんありましたか？我を振り返るとバツと思いつくエピソードが思い当たらず、早くも「来年は」となってしまうました。(M)